＊＊＊　北海道の戦略的重要性

北海道の戦略的位置付けを考える上で、樺太がロシアと陸つなぎであるか否かは単に地理的な興味にとどまらない。往時、林子平がその著『三国通覧図説』に、オランダ人の説をとり入れ、樺太を東韃靼の半島としてから半島説が広まっていた。

1809（文化 6）年間宮林蔵（1780-1844）が間宮海峡を発見したのは、今からちょうど200 年前のことである。樺太が大陸とつながっていないことがわかり、北の脅威に対する我が国の防御線として北海道が注目される歴史上のエポックとなった。

とくに、1853（嘉永 6）年 7 月、ロシアのプチャーチンが長崎に来航し、日露間の外交関係は緊迫化。蝦夷地の調査は当時の幕府にとって重要な課題のひとつとされ、北海道経営の基礎となる地理や新しい道路を造るためのルートの調査、アイヌ民族の実態調査などが行われることとなる。

ちなみに、当時ほぼ正確な北海道の地図情報を提供したとされる伊能忠敬（1745-1818）による測量は 1800（寛政 12）年に行われ、『蝦夷地実測図』（伊納大図）などとして現存するが、その際、伊能は蝦夷地で間宮林蔵に出会っているとされる。なお、全国版は 1821（文政 4）年に『大日本沿海輿地全図』（計 225 枚）などとして完成している。

このときから、当時の政府（江戸幕府）は北海道の戦略的位置づけ、経営の必要性を意識したのであり、引き続き間宮林蔵に千島列島探検探査、松浦武四郎（1818-1888）に蝦夷地の調査を行わせている。

そして、明治政府は、樺太へのロシアの進出が目立ちはじめたため、樺太にも防衛の体制をとることとし、1870（明治 3）年 2 月、開拓使の管轄から分割して新たに樺太開拓使をおいた。実態は、設置はしたもののその仕組みは決まらず、独立した機関とはいいながら、開拓使の出先機関に近いものであった。同年 5 月、兵部大丞黒田清隆が開拓次官に任命され、併せて樺太専務を命じられている。

他方、国が策定する計画として 1910（明治 43）年に『北海道拓殖事業計画』（のちの北海道第一期拓殖計画）がスタートしてから 100 年を迎える。明治政府が 1869（明治 2）年開拓使を置き、蝦夷地を北海道と改称してから 40 年余り、ようやく北海道の開拓を牽引する基盤整備が政策、計画に位置づけられた。この間、1874（明治 7）年北方警備と開拓を担う屯田兵制度を創設して入植を進めるなど、北の脅威に備えた施策が実行されるが、資金的裏付けのある計画的な開拓にはじめて着手することとなるのは 1918（大正 7）年のこと。それは皮肉にも日露戦争、第一次大戦などを経て、北の脅威に対する備えとして北海道の戦略的重要性が一層増すとともに、拓殖計画の実施など北海道経営の予算的裏付けが戦勝によって可能になるまで待たなければならなかったのである。

今年に入って、「英米両国が1950年代初頭に中ソ主導の北海道独立を警戒していたことを示す一連の機密文書が見つかり、東西対立が激化する中で、北海道が置かれた戦略上の重要性を再認識させられた。」との記事が掲載された（2010（平成 22）年 1 月 5

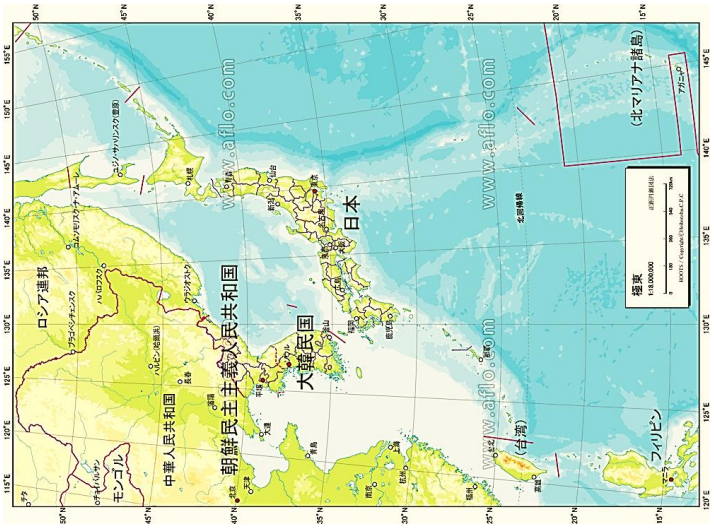
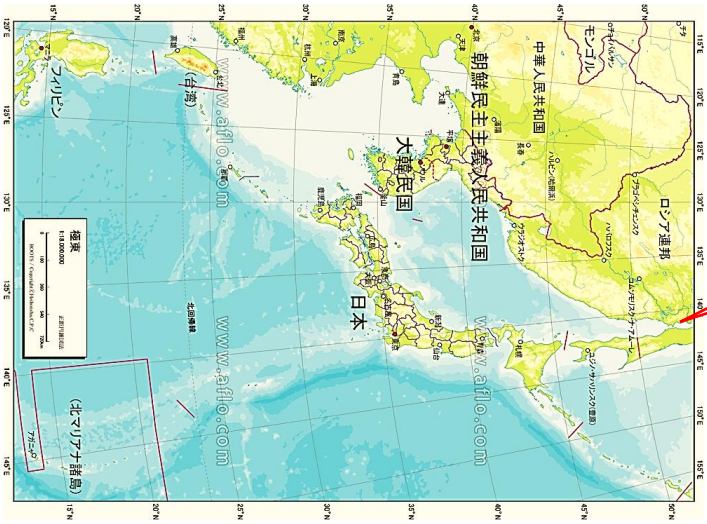
日北海道新聞朝刊 5 面)。北海道の地理的位置は、冷戦構造が進行するなかでも戦略的に重要な意味を持っていたことを物語る事実である。

しかし、従来の冷戦構造が氷解した現在、北海道の戦略的位置づけは先行き不透明になりつつあり、低迷する経済情勢下にあって地域経営の前途は楽観を許さない。

国が北海道に期待する役割分担を発揮できるようにするために必要となる投資のひとつに北海道開発予算があるが、紙上、昨年末閣議決定された平成 22 年度(2010 年度)予算の政府原案は 4,857 億円(国費ベース)、対前年度当初比 17%減、過去最大投資の半分以下と伝えられる。制度改正、事業配分など詳細は不明確ではあるが、社会基盤整備が遅れ、その機能を十分発揮できていないなかで、これからの付託に応え、役割分担を果たしていくための投資としては心許ないものと言わざるを得ない。

北海道の地理的位置に根ざす問題・課題を考えていく上で、まず北海道の戦略的位置付けを認識しておくことが重要である。

20100318　MS生



伊能忠敬像(富岡八幡宮)